最上紅花典放談　十話

今田信一

第一話　令子さんの結婚式と紅

過日（註―昭和三〇、六、二九）、山形市七日町にお住いの民芸研究家、しばた、はじめ氏を訪問しました際、誠に心にくい程の雅致に満ちた、結婚披露の挨拶状を拝見いたしました。それは、去る四月に華燭の典を挙げられた、仙台市の佐々木顯一郎氏と、碧河江市の鈴木令子さん（註―鈴木与右エ門氏令嬢）の所から送られたものでした。新郎は味噌屋さん、新婦は酒屋さんという妙な組合せですけれども、味噌も酒も日本趣味の代表的なもの、そういう中から生れたこの挨拶状は、立派な本柾紙を用い、表には、新郎顯一郎氏誕生初節句（註―昭和四年五月五日）の時の、実に可愛いらしい手形や、「笹十」の商標や、「丸に四つ目」の家紋等を、本版にして配（あし）らい、中を開けば、その日の盛典を記念した御両人の、式場に向われる時のものでもあろうか、自動車に乗られた美しい姿を写真にして貼布されてあり、その手配りの美事さには、暫く言うべき言葉もなく見惚れさせられました。しかもこの趣向も版画も総て顯一郎氏の考案自作にかゝるものと聞いては、一層感に打たれた次第です。

こういう気の利いた風雅な書状を入れた封筒の、封緘に用いた「壽」という文字は、ま

た、それこそ見事な本紅をもって書かれてあるのです。薬指の先を舌で一寸しめして、その文字を軽くこすると、その真紅の紅が指先に奇麗にうつりついて来るのです。人生一生一代の盛事を告げるこの書状を、このような紅をもって固く封じた御面人の美しい心情に打たれた私は、現在の私にとって、別に親しい縁りがあるという訳でもない所の御面人に対してすら、何かしら温い愛情というようなものを感じ、その将来の御幸福というものを、心から祈らずにおられませんでした。これは、真実の美しさというものに接した時の、人間の至情であるかも知れません。

ところで、終戦後の生活様式は随分変って参りましたが、特に目立って来ましたのは、婦人の衣装や化粧の色合が非常に原色的になり、それだけに際立って美しさを加えて来たことであります。しかし単純な原色の配合でありますので、色彩感覚からすれば、実にはっきりとしており、万人の目を引き易く効果的ではありますけれども、一面から言えば、ケバケバしく、むしろ毒々しくさえ感じさせられます。こういう傾向は、いわゆるあちらさん好みの影響を受けたものでありましょうが、日本人本来の気質から考えるならば、如何なものでしょうか。

昔の妙齢の婦人方は、玉虫色というか、笹色というか、底に深い青味を含んだ、紅地錦の衣装を好んだが、この染料に使用された紅は、元来は光線を吸収して、褪色し易い性質を持っておりますので、若い頃には美しい紅色で染めた衣装も、中年頃には焦茶色の渋い落ちいた色合に変色して、却って年配に似つかわしい上品さになるのみならず、長い間に、裏地等に用いた本紅染の紅絹（もみ）の紅の色素が、自然と科学的作用を起し、人体に新陳代謝

という生理的現象を与えるために、年齢の割合に、優雅な若々しさを持続することが出来たのであると言われます。

口紅をつけることも昔からありました。奈良薬師寺の吉祥天像、同正倉院の鳥毛立女屏風の美人、同法隆寺金堂壁画の菩薩像等は、何れも美しく口紅を施しており、天平時代の豊頬美女の典型を現わし、見ておりますとむしろ愛欲をさえ誘うようであります。そう言えば、慈恩寺弥勒堂の秘仏、御本尊の大日如来も口紅があったように記憶しております。鳥毛立女屏風の美女は、さらに頬紅もつけております。こういう化粧法は、奈良時代や平安時代においては、上流社会や貴族階級の人々に限られておったのでありましょうが、江戸時代のように、文化が普及し、庶民の生活も向上して来ると、一般にも随分流行して参りました。しかし、「用捨箱」とか「守貞漫稿」とか、或は「嬉遊笑覧」等という本を読んでみますと、それは決して今の世の血を塗ったような真紅(まか)さではなくして、「唇の色は玉虫の如く光るを良し」としたものでした。

京都から売り出された「小松紅」、山形の紅屋久太郎から販売された「千歳紅」、同じく槍屋勘右エ門で製造した「玉紅」等、その名称を聞いたゞけでも、「五分間で一日美しい落ちないブルーフ」等という今時の廣告と比較して、どれほど奥ゆかしいものであるかわかりません。これらは何れも「うつし紅」とか「紅皿猪口」と言われるもので、紅を皿や猪口に塗り移して保存し、使用する時は、薬指か紅筆というものを用いました。紅筆というのは、三寸程の短いもので、両端に小さな刷毛のついた筆でした。こんな皿や猪口では、持ち歩きに大変不便ではないかと思われるでしょうが、その時にはまた都合のよい「

板紅しというのがありました。それは、長さ四五寸、巾二寸程の厚紙で作った漆塗板の折畳式のものに、紅をのばしたものです。体裁も中々凝った物で、若い婦人方が外出される時には、これをそっと懐にしのばせて行ったのです。

本当に美しい化粧というものは、単なる事務的なものであってはならないと思います。化粧というたしなみは、元来は人間の性的本能から出発しているものでしょうから、所かまわず、むきつけにするよりも、むしろ、羞らいながらそっとする方が、艶かしい風情もあり、それだけ効果もあるのではないでしょうか。しかし、世の中が忙しくなり、婦人方も落ちついて、化粧等のことを考えている暇がなくなりましたから、言う方が無理であるかも知れません。

また、本紅の原料となる紅花は、わが村山地方、昔は最上と言いましたこの地方が、全国の主産地でありましたが、その製造方法が困難なために、明治の初めごろから、いわゆる西洋紅に圧されて、全く衰微してしまいました。そのために、現代の一般人からは、紅花というものは殆ど忘れ去られてしまったのです。科学の進歩とか、経済の変遷とかいうものは、私たちの日常生活を遠慮なく変更して行くもので、これはどうにもならない歴史の力というものでしょう。所がどうでしょう。品質や原料そのものが科学薬品に代り、製造工程が簡単になり、経済的には安価になっても、唇を装飾したり、頬を美しくしたり、赤い衣装を喜ぶという本能だけは、変りがないのです。つまり化粧の本質には一向変化がないのです。

そこで、日本在来の染料であった紅花から、何とかして簡易に本紅を抽出する方法はな

いものかと、山形の岩淵栄治氏、市村利兵工氏、渡辺友次郎氏、しばた、はじめ氏等が中心となり、川崎浩良氏や鈴木清助氏等の先輩の助力を得て、昭和二十五年十一月に、山形紅花振興会というものを結成し、ずっとその研究に専念している訳であります。そのため、紅花に関心を持たれる方が全国的に多くなって参りましたが、幸いなことに、昨昭和三十年の七月には、東京都新宿にある資源科学研究所の、和田水先生が、漆山の志村に来られ、十数日間に亘って紅花の科学的な研究をなされた結果、色素の抽出に成功されたので、最上紅花の将来にも、明るい見透しが立って参りました。今年元旦の和田先生からの賀状に、「皆様の御支援によりまして、漆山志村での紅花研究を、山形市で助成して下さいますとのことになり、感謝しております」と附記されてありますが、現代的に調和のとれた肢体と、きびきびとした健康的な活動力の中に、さらに天平時代から伝わる化粧の美しさを取り入れた、新しい日本婦人の姿を見ることの出来るのも、間もないことでありましょう。

弘化四年版の「重訂本草綱目啓蒙」という本を見ますと、紅花は全国の中でも「奥羽仙台より出るを上品とす。出羽の山形これに次ぐ」とありますが、産業経済史や文化史上、重要な役割を果していた二つの国の、顕一郎氏と令子さんが、御結婚の挨拶状を真赤な紅で封じたということは、誠に意義の深いことであり、心から嬉しく思います。